

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ことばからはじまる世界、ことばで広がる宇宙：
翔べ！世界へー奨学生体験記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊澤, 律子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4901

ことばからはじまる世界、 ことばで広がる宇宙

国立民族学博物館民族文化研究部・
総合研究大学院大学准教授

菊澤律子
きくさわ りつこ

皇太子奨学金奨学生（一九九五—九六年度）。文学修士（東京大学）、Ph.D.（ハワイ大学）。東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所を経て、二〇〇五年度より現職。国際歴史言語学会会長、国際オーストロネシア言語学会運営委員。専門は言語学、オセアニアの先史研究。



二〇一〇年三月、国立民族学博物館に世界でも珍しい言語展示場がオープンした。規模こそ小さいものの、約二〇〇言語の録音や映像資料とともに、ことばの「おもしろい！」がぎゅっと詰まった展示場は、幸いにして来館者の評判もよく、主要メンバーとして準備にかかわった私はちょっぴり鼻が高い。

現在も、ギャラリートークや学校の先生方の研修に参加するなど、展示場との縁は続く。ハワイ大学から世界の言語学界へ、言語学から考古学や遺伝学などの学際研究へと広がった世界が、今度は、研究界から博物館へ、博物館から社会へと、別の次

元へ展開をはじめた。ことばを軸にして広がる宇宙の、ちよつと思いがけない展開に驚くと同時に、今後の発展を楽しみにしている自分がいる。

それは一枚の紙切れから
はじめた

「菊澤さん、これ」

博士課程に進学してまもなく、指導教官からある日突然手渡された紙。皇太子奨学金の募集要項だった。ハワイ大学で勉強するために二年間の奨学金が出るという。フイジー語を研究していた私は、当時はいつも現地調査に行くための費用をどう工面す

●皇太子明仁親王奨学金（二〇〇八年一月に名称変更）は、現在の天皇陛下のご成婚とハワイご訪問を記念して、ハワイの日系人、ホノルル日本商工会議所、経団連を含めたわが国経済界の協力により、一九六〇年に創設された。日米両国の相互理解と友好親善の推進を目的に、ハワイ大学と日本の大学との相互留学を行っている。

るかで頭がいっぱい。留学なんて考えたこともなかった。

「申請しなさい、ということなのかな？」
ハワイ大学は太平洋言語研究の拠点の一つとなっており、私の留学先としては理想的だったが、それは後になって気づいたこと。ただ、ご自身も留学経験がある先生には、きつとそのことがよくみえておられたのだろう。

外に出て初めて自分のことがわかるというが、学問の手法についても例外にあらずなかでも忘れられないのが、「できるだけ大胆な仮説を立てなさい」という助言である。緻密な観察に基づき、いかに正確に分析し記述するかを学んできた私にとって、データに表れていない事実を予測して仮説を立て、それを検証しながら、より大きな一般化に結び付ける演繹的手法は「目からうろこ」であり、それまで感じていた行き詰まりから脱却できそうな可能性を感じた。大事にしなかった研究プロジェクトも、

（注）国立民族学博物館の言語展示場については、
<http://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/language/>を参照



新しい言語展示場での博学連携教員研修ワークショップで

戯れに話してみると「どんどんやれ」という。結果、博士論文では日本にいるときには考えられなかった大胆な課題を選ばせてもらい、その成果を基盤として太平洋の諸言語の発達史の全貌を明らかにするという課題がいまでも私の前にそびえている。

👉ことばの魅力を伝えたい

二〇〇九年はじめ、職場で言語展示構想の具体化がはじまった。世界にはたくさんのことばがあることを知ってほしい。ことばで遊びながら、その不思議や魅力に気づいてもらえる空間にしたい。想いは一貫し

ていたが、専門知識を来館者の「わかりやすい」につなげるための模索が続いた。世界にはたくさんの方々の言語があつて、その数は約七〇〇〇といわれる。でも言語と言語の境界に印がついているわけではないから、数字は絶対的なものではない。主語、目的語、動詞という日本語の語順は、世界の言語で最も一般的なものである。でも、語順の決め方にはいろいろな問題があつて、研究者の間でも一致をみていない。話を単純化すれば学術的に不正確になり、正確性を期せば教科書のおもしろくなくなってしまう。

さらに私は、世界の言語の分布状況と言語間の関係が一目でわかるように、言語の系統を地図の上に示したいと考えた。が、提案してみると別の研究者から異議が出た。系統と地理的事実の関係は検証されていないし、そもそも言語の系統関係については学説が拮抗している。そんなものを公の場に展示したら物議を醸す、と。しかし、ハワイ大学にはじまり世界を舞台に言語学を科学としてとらえてきた私の経験を基にすると、最新の研究成果を反映させようとしたら、「定説」などはない。大切なことは、どこまでがわかっていて、どこからがわかっていないのかを、きちんと示す

ことではないか。研究者がかかわっているこの展示では、それができるはずだ。

そんな議論を経て完成したオリジナル系統図は、授業に使用したいとか、手元のことばの地図を置きたい、などさまざまな理由で印刷版のリクエストが続いている。ただしこれは、世界各地での研究が進むにつれてどんどん改良を重ねていくことになる発展途上の図なのだけだ。

👉ハワイ大学は里帰り先

八月に新しい展示場で行われた博学連携ワークショップに参加された学校の先生方からのコメントには、「世界イコール英語」となってしまうという生徒たちをこの展示場に連れてきて、英語が世界にたくさんある言語の一つにすぎないのだということを「感じさせたい」とあり、目的はまず達成できたかなとほっとした。そして私の方はいえ、今後展示を良くしていくのも先生方のお話も、学術的な裏付けがあつてのこと。そろそろ本業にも戻らなくては、というわけで、久々にハワイ大学の教室に座りに行きたいな、などと考えている。教える立場になつてからも他の研究者の授業を聴講し知識を磨き続けるというのも、もちろん、留学時代に学んだ習慣の一つである。